

序

本論集は、二〇一五年四月二三日、享年四三歳にして卒然として逝かれた河角龍典教授（以下、河角さんと記させていただきます）を追悼すべく、同僚教員など関係者から寄せられた論文や彼をめぐる思い出を綴ったエッセイを編んだものである。

河角さんは、略歴にあるように一九九四年立命館大学文学部地理学科地理学専攻を卒業後、同年、同大学文学研究科博士課程に進学され、一九九六年に前期課程を、そして二〇〇三年には後期課程を修了され、博士論文「宮都地域における地形環境と土地利用の特性に関する研究―藤原京・平城京・平安京を事例として―」をもって博士号（文学）を取得された。その間、（財）大阪府文化財調査研究センターにて非常勤専門調査員や立命館大学文学部地理学専攻の実習助手を務められた後、二〇〇三年より立命館大学COE推進機構講師、二〇〇五年からは立命館大学文学部人文総合科学インスティテュート総合プログラム講師、二〇〇九年には同学部人文総合科学インスティテュート京都学プログラム准教授、そして二〇一二年に同学部地域研究学域京都学専攻准教授に就任され、二〇一四年には同専攻の教授に昇任された。

こうした経歴からもうかがわれるように、河角さんは一貫して立命館大学において学び、研究し、教育にたずさわってこられた。とくに、「京都学」を冠したプログラムおよび専攻において、京都など古都の歴史時代における地形環境にかかわる地理学的研究と、その成果をふまえた教育に堅実に取り組むとともに、「デジタル人文学」という立命館大学ならではの革新的な学問領域の構築と、その教育プログラムの運営にあたられ、文学部教学の新展開に寄与された。そして二〇一四年からは、文学研究科に新設された行動文化情報学専攻文化情報学専修の立ち上げにも尽力された。

また、河角さんは二〇一一年度には文学部学生主事として、学部行政にも貢献され、その手腕と人柄の良さは、執行部のみならず教授会および文学部事務室からも高く評価され、近い将来、再び学部執行部の一員としての活躍が期待されていた。

さらに、河角さんは歴史都市防災研究所、アトリサーチセンターおよび環太平洋文明研究センターを拠点とする、数多くの研究プロジェクトにかかわることにより、毎年、優れた研究業績を絶え間なく発表されてきた。そうした旺盛な研究活動が注目され、人文地理学

会、条里制・古代都市研究会、立命館地理学会、日本文化財科学会などで各種委員を担われるなど、学界においても多大なる貢献を果たされたのである。

しかし、こうした超多忙な教育・研究生生活がたたってか、三年前に、突然体調を崩し、緊急入院後、手術を受ける身とられた。その後、しばらくの間、病院とご自宅で静養されていたが、二〇一四年度後学期には大学に復帰された。キャンパスで再会した際には、「かなりスリムになりました。食事は以前と同様、おいしく食べられるようになりました」などと快活に受け応えし、前向きな発言をされる河角さんの様子が安堵したものである。しかし、その後、再入院を余儀なくされ、急逝されるとは……。

数多くの学生に慕われる教育者として、また環境考古学、歴史地理学、自然地理学、デジタル人文学の領域で嘱望される研究者として、その将来が大いに期待されていた河角さんの突然の死去が、私たちにもたらした打撃はあまりにも大きい。奥様やお子たち、さらに皆様ご両親のみならず、私たち周囲の者も安堵していた最中の急逝であったことは、口惜しい限りである。河角さん自身、さぞかし無念極まる思いでいっぱいだったかと思う。

昨春四月一四日・一五日、雨降るなか、大津・三井寺円満院での通夜と告別式に、数多くの学生・院生諸君、卒業生、学園関係者、同僚など教職員が、河角さんとの別れのために参列されていた。河角さんの人望の厚さを覚えざるを得なかったものである。

ここに論文や思い出の記を寄せられた方々の河角さんへの思いは、それぞれのつながりのあり方によって異なると思われるが、何気ない日々の会話のなかで、彼の話が話題になることがしばしばある。河角さんが私たちの心の中にいつまでも生き続けていることの証であろう。心よりご冥福を祈りつつ、この追悼論集を河角さんに謹呈いたしたい。

二〇一六年十二月

立命館大学人文学会会長

文学部長 藤 卷 正 己